日本語教育実践研究(11)
—「総合活動型日本語教育」の実践と研究—

細川　英雄

この実践研究は、「総合活動型日本語教育」実践研究として位置づけられ、早稲田大学日本語研究教育センター別科日本語専修課程のなかの「３・４β」を実習クラスとし、その観察・分析を踏まえつつ、「私にとって総合活動型日本語教育とは何か」についてレポートを書くという活動を展開しました。

このような実践研究を実施するのは、教育としての実践について、それぞれが考えてみようという試みです。自分の「考えていること」を明確につかみ、他者に伝え、その他者と具体的な人間関係を形成する力が、コミュニケーション能力だとするならば、教師自身もまた、そのような問題について考える必要があるでしょう。

ここでは、まず「総合活動型日本語教育」への自分の立場を述べ、その動機をもとに、関係者との深い対話を行い、その結果を踏まえて、自分の結論を出すという活動です。この過程で、参加者は、日本語教育のさまざまな立場に出会い、その立場とのインターアクションを経て、やがて自分の立場を形成するにいたります。

今回は、３名の参加登録者(任意参加者を含まず)のうち２名のレポートを掲載しましたが、これは参加者による話し合いのの結果によるものです。

「実践研究とは何か」は、日本語教育実践を行いかつ考えるものにとって不可避の課題です。だからこそ、今後も、実践と研究の関係を問い直すことが必要なように思われます。そのためには、実践と何か、研究とは何か、という問いをもう一度それぞれが考え、議論する場が不可欠でしょう。「私はどのような教室をめざすのか」という問いを教師自身が持つようになることで、それぞれの実践を相互に鍛えていく学びの場を提供したいと考えています。6号を数える、この刊行物も一応の一区切りを向かえ、来期からは、『早稲田日本語教育学』という総合学術誌へ向けて統合されますが、自らの実践の中から生み出した、さまざまな発見と学びの場への、多くの院生諸君が積極的に参加され、実践と研究をめぐる、さまざまな活発な議論の巻き起こることを期待したいと思います。

（ホソカワ・ヒデオ・日本語教育研究科教授）